

第25回日本看護管理学会学術集会開催

「持続可能な社会をリードする創造的看護管理」をテーマに

第25回日本看護管理学会学術集会（学術集会長：横浜市立大学教授・叶谷由佳氏）が、2021年8月28日、29日の2日間にわたり開催された（オンデマンド配信は8月28日～9月27日）。2020年に開催された第24回は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）感染拡大の影響でオンライン開催となったが、今回は現地（パシフィコ横浜ノース）とWeb配信によるハイブリッド開催に変更となった。

学術集会のテーマは、「持続可能な社会をリードする創造的看護管理」。第25回を迎えた節目の年に、変化する時代における看護管理の役割や、看護管理者に必要な能力を改めて考える幅広いテーマが各プログラムで議論された。参加者数（登録者数）は4605名。

（本誌編集室）

学術集会長講演

学術集会長講演では、「持続可能な社会をリードする創造的看護管理」と題して、叶谷氏が自身のこれまでの豊富な経

験を踏まえながら、看護管理学の動向や変遷、看護管理に関する研究を振り返った。

叶谷氏は、「日本は現在、少子高齢社会に直面し、今後は多死社会となり人口減少が予想される。また、気候変動や自然災害、新興感染症のパンデミックなどにより看護の需要は高まる一方である。リソースが限られる中で、いかに持続的に看護を供給していくかを創造していく必要がある」と述べた。

また、自身が研究対象としてきた、クリティカルパス、退院支援、新人看護師の定着などのテーマについて触れ、これからは看護管理学を基盤とした看護行政への関与が重要になると考察した。

そのために、看護管理者に必要な能力として「概念化能力」と「現象を観察し、可視化する能力」を挙げ、看護管理者がどのように社会を捉えるかが大切になるとした。そして、看護管理者は、今後どのようなことが起こるのか、常に先を読んで発信していかなければならないとメッセージを送った。

シンポジウム1 「看護の本質と管理」

シンポジウム1「看護の本質と管理」では、日本看護管理学会／日本医療・病院管理学会ジョイント・リレー企画として、改めて「看護の本質」を実践するための「管理」とはどうあるべきか、看護学、病院管理学、医療情報学、看護管理学のそれぞれの視点から発言があった。座長は勝山貴美子氏（横浜市立大学大学院）と鶴田恵子氏（聖隷クリストファー大学）が務めた。

川村佐和子氏（聖隷クリストファー大学）は、「社会に貢献する看護」というテーマで看護職の社会的位置づけの高まりについて振り返り、社会からの期待を背景に、看護職は看護職自身に関する関心にとどまらず、視野を広げ、積極的に

社会貢献することを追求し、実行していくことが重要ではないかと述べた。

井部俊子氏（長野保健医療大学）は、「看護の本質への回帰」として、『新型コロナウイルス ナースたちの現場レポート』（日本看護協会出版会編）で書かれた山田眞佐美氏（大阪国際がんセンター）の文章を例に、「看護の本質」に回帰し、看護管理学が刷新される時が来ていると述べた。また、「臨床看護のプロBLEM」として「さまざまな要因で臨床ナースのウデが落ちている」「インシデント発生を防ぐための効率性と安全性の過度な追及」などの問題点を取り上げた。関心が経営（病床稼働率や収益など）にシフトしがちな看護管理者の志向についても指摘し、「看護管理者の最も大きな使命は、自分の施設において提供される看護サービスの質であり、患者の尊厳や安楽が脅かされていないかに腐心することではないか」と力強く語った。

特別企画「日本看護管理学会の未来を語る—将来構想報告書から—」

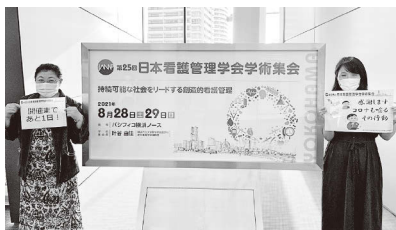
特別企画では、上泉和子氏（青森県立保健大学）、鶴田恵子氏、別府千恵氏（北里大学病院）の3名の演者が、オンラインでの座談会形式で日本看護管理学会の将来構想に関する現在までの歩みを振り返るとともに、学会の未来について意見を出し合った。

日本看護管理学会に立ち上げられた将来構想委員会は、2019年3月には「将来構想委員会報告書」として、2023年を目途にした構想実現に向けての取り組みを提案した。2021年は将来構想発出からの中間点に当たり、多くの参加者と将来構想について共有することを目的にこの特別企画が実現した。

座談会では、看護管理実践の質向上に資する取り組みとして、優れた看護管理実践（グッド・プラクティス）の集積・周知や“アウトカムの見える化”の重要



学術集会長の叶谷由佳氏



開催までのカウントダウン。SNSでの発信・交流も積極的に行われた

性が語られた。

また、別府氏は、コロナ禍で“看護の専門家”としての看護師の存在を発信することの重要性を再確認したとし、2020年12月10日に日本看護管理学会が発信した「日本看護管理学会より国民の皆さまへ—ナースはコロナウイルス感染患者の最後の砦です」と題するメッセージについて、「学会が主体となって発信することの意義について考えさせられた経験として、今後の将来構想にもつながる」と述べた。

COVID-19によるレジリエンス

COVID-19については、「レジリエンス」に注目した教育講演とシンポジウムも企画された。

教育講演2「COVID-19対応において医療システムのレジリエンスはどのように発揮されたか」では、中島和江氏（労働者健康安全機構）が、レジリエンス・エンジニアリング理論をもとに、医療機関で見られたCOVID-19へのレジリエントな対応がどのように行われたのかを分析した。

続いてのシンポジウム2「COVID-19禍で発揮されるリーダーシップとレジリエンス」では、先の中島氏と花井恵子氏（元神奈川県看護協会）を座長に、江守直美氏（福井県看護協会）、高橋弘枝氏（大阪府看護協会）、鈴木美智子氏（横浜市立大学附属市民総合医療センター）をシンポジストに迎え、非常事態において



閉会式の様子

どのようなリーダーシップを発揮していく必要があるのか、レジリエンスの視点から検討された。

パネルディスカッション4 【情報発信・交流】COVID-19禍でも現場の学びを止めない！ 実践の工夫と取り組み

COVID-19は現場での医療提供だけでなく、教育にも大きな影響を与えた。

パネルディスカッション4「【情報発信・交流】COVID-19禍でも現場の学びを止めない！実践の工夫と取り組み」では、北浦暁子氏（西武文理大学）を座長に、基礎教育、新人看護師教育や継続教育、メンタルサポート事業における取り組みが紹介され、コロナ禍における現場の学びを支える人的資源開発の課題について発表とディスカッションが行われた。

長坂奎英氏（キッコーマン総合病院）は、立案していた研修計画を見直し、集合研修で企画していたものをeラーニングによる自己学習形式、部署に講師が出張する分散方式、少人数でのOff-JTに変更するなどの取り組みを紹介。コロナ禍においても成長する視点を維持するた



学術集会ポスター

NA REPORT

めの教育環境の整備について、自院での実践を報告した。

今後もコロナ禍の影響が続くとみられる看護の現場において、看護職のスキルアップやキャリア開発をどのように支えていくべきか、多くの看護管理者が悩みや迷いを感じている。パネルディスカッションでは、さまざまな立場や視点からの実践例が示された。

*

今回の第26回学術集会は、宇都由美子氏（鹿児島大学病院医療情報部教授）を学術集会長に、2022年8月19日、20日に、福岡市の福岡国際会議場、マリンメッセ福岡を会場に開催される予定。